

ART KISS LETTER

TITLE

第35回熊本市民美術展
熊本アートパレード

DATE

2024

1.13^土 / 1.28^日

開館時間 10:00-20:00
(最終日は17:00閉場)

休館日 火曜日

本年度テーマ

足元の展望台

—「近所」から見える世界—

出品数

268点



Yasuhiro Suzuki

審査員講評



Photo: Timothee Lambrecq

アーティスト 鈴木康広

今回の審査は、決して簡単なものではありませんでした。多種多様な268点もの作品にどう審査基準を設けるべきか。そもそもアートは比較できるものではないので非常に悩みました。一望して、想像以上に今回のテーマ「足元の展望台―『近所』から見える世界―」に応えようという姿勢を見て取ることができました。このテーマは私の制作活動や作品名に由来しており、長くかかわってきたものです。出品作品の中には、私にはまったく気が付かなかった視点がたくさんあり、一人の観客として目を見張るものがあったと同時に、アーティストとして自分自身のテーマにこれまでにないかたちでアプローチできたように感じています。審査というよりは、「一つの展覧会を出品者と一緒に作った」という感覚です。作品には、作り手が意識して取り組んでいることはもちろん、本人も気づいていない要素が内在しているものです。その魅力を発見できる場になることを願い、そういった「芽」や「きざし」を感じられるものを受賞対象に選びました。いずれも作品そのものがまさに「展望台」となって、見る人に新たな景色や揺らぎを与えています。また審査が終わってから分かったことですが、若い作り手たちも多く入選を果たしています。高い技術や考え抜かれたコンセプトよりも、彼らの等身大の考えや今感じていることが私の胸を打ったのだと思います。アートは観るタイミングによってもその姿を変えるもの。観客の皆さんには、訪れるたびに見え方が変わる「展望台」として作品をお楽しみいただきたいと思います。

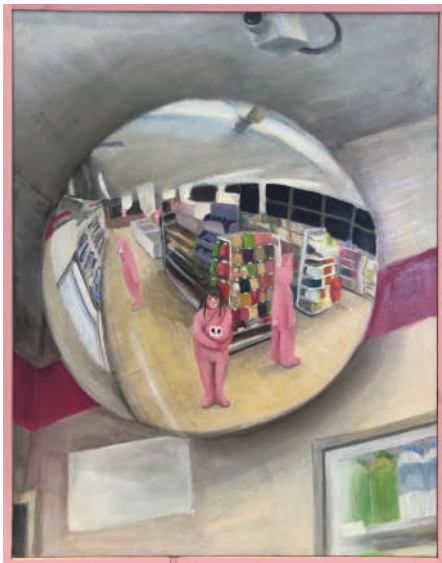


アートパレード大賞〈熊本市賞〉

米澤 藍 [My garden]

ベンチの脚元への着目は、今回のテーマへの応答としても大変インパクトがありました。おそらく立体作品の出品条件である「高さ、幅、奥行いずれも100cm以内」に収めるために生まれたのですが、人間のための背もたれと座面はバッサリと切り落とされ、ラフに仕上げられています。一方で、鳥たちの足元の石量はとても丁寧に仕上げられている。ハトとスズメは同じ鳥でありながら、おそらくは相入れない部分をもっているはず。ここで理想的に共存している姿は、どこか人間同士を表しているかのようでアイロニカルにも受け取れました。発泡スチロールという安価な素材を扱い、現状の価値観やリアリティを揺るがす点は、現代美術らしい作品と言えます。ハトとスズメのしぐさや視線に、作者の経験に基づく感性が表れているようにも感じました。いつしか当たり前と化した現状を疑い、未来にあるべき視点へと誘う「熊本アートパレード」の大賞にふさわしい作品だと思いました。

熊本市現代美術館賞



緒方 和 [取り繕う]

作者自身がふだん感じている現在の違和感を見る人にしっかりと体験させる作品です。コンビニという情報化された空間、防犯カメラやミラー、ペットボトルのお茶や水など、作者の世代にとってはすべてが当たり前のものですが、これらは「安心・安全」であると同時に「管理・監視」という現代社会の表象です。ウサギの着ぐるみを着ている人たちが複数描かれていますが、自分の感じていることを他者にも尋ねてみたいのでしょうか。それともコンビニを歩き回る自身の姿であり、着ぐるみを脱ぎミラーで自分らしさを確認しているのでしょうか。色々な読み解きができる作品だと思います。自分なりにさまざまな問題意識を持っている作家で、現在の等身大の表現として非常に好感を持てました。今後、制作を通して自分の足元からさらに社会へと視野が広がることで、現代アートとして展開・飛躍する力を感じました。



審査員特別賞〈鈴木康広賞〉

メグ [BEYOND THE NET]

じわじわと引き込まれていきました。大災害とそれによる石垣を戻すという途方もない作業に対し、多くは憂いの気持ちを持つでしょう。しかし、その出番を待つ石たちに“温かさ”を感じるという作者のコメントに胸を打たれ、理解を超えてそこに清々しささえ覚えました。通常、なるべくフェンスを入れずに撮影を試みると思いますが、作者はあえてそれを入れ、タイトルでもそのことを明示しています。そこに独自の感性を感じました。そして簡単に手に入りそうなカッコつけないこの額縁がカッコよく見えてしまった！奇をてらった感じはなく、すべてが自然体に提示されていてショックでした。石垣が自然によって破壊された状況と、揺れる大地に立ち上がろうとする人間の「足元」。この写真に写ったモチーフをめぐって、この作品が私自身の「展望台」となり、審査員特別賞に選ばせていただきました。

優秀賞

酒井 貴輝 [超近視]

細胞やミクロな生命体を想起させるパターンは、近くにありながら肉眼では見えない遥か遠い世界を思わせます。人間界で物体として普遍的な価値を与えられた「金(箔)」を直に使っていることも、「超近視」というタイトルにどこかつながっているように感じます。間近に見ないとわからないディテール、距離を取らないと見えてこない形態。目の前にある価値観を飛びこえて、何ものかに手を伸ばそうと挑む作者の意思を感じました。



佐藤 昭 [誘致]

審査中、数々の作品が並ぶなかでパッと目を引く作品でした。下方の部分は都市のビル群のように見え、廃墟のようでもあり、よく見るとそこにはたくさんの色が織り重なり合っていることに気づきました。垂直なストライプが放つ崇高さと相まって、見る側の認識から逃れていくような、視覚に混乱を引き起こすところに魅力を感じました。

赤星 由紀子

[庭石菖の花時]

審査時に立てかけていたために足元と地続きとなり、まるでそこに生えているような錯覚が生じました。まだ描きたてのようで、「生乾き」という注意書きが作品に添えられていて、絵が初々しくそこに生えているような不思議な感覚になりました。展示では、ぜひ足元に近いところに展示させていただきたいです。



田口 ジジ

別府湾の海のブルーとケイトーの花のレッド

何か対象を見つめるというより、見ることそのものの性質にふれるような作品です。絵の中に額縁のような2つの窓がやわらかく接していて、青と赤の作用で「遠く」と「近く」を同時に眺めるようなふしぎな感触がうまれます。近づいてみると、細い線の「まる」が無数に書き込まれており、しばらくそこに佇んだり、平面の中に漂うことができる。そんな視覚体験を楽しめる作品です。

石橋 奈於 [忘れ物]

子ども時代に感じたお菓子の独特の存在感とその計り知れない魅力。そこには目に映るものとは異なる様相があったような気がします。それは成長とともに変化し、必然的に失ってしまうものなのかもしれません。作者はその誰しもが感じていた記憶を描いてみようと思い、実際に見える色とは異なる色を私たちに見せてくれました。今はないものだからこそ、思い描けるのかもしれない。



奨励賞



西生 美顕

「軽宇宙船」

ベニヤ板の表面に現れた軽やかな宇宙船。キャンバスと違って滑らかに描けないベニヤ板の抵抗感。UFOがよく見えた時代は過ぎ去り、ほとんど見かけなくなった今、まさか町の片隅にいたとは…！よく見える場所に飾るのではなく、アトリエの板類の中に潜ませておいて欲しい作品です。



中原 孝

「在る」

ガスメーターを管理する人以外、なかなか関わることもないような場所。しかしメーターを見ている人はその場所に流れる時間や光の変化に気づきにくいかもしれません。長く時間をかけて描くのは、その場所によほど心惹かれるものがあつたのでしょうか。絵を描くことの意味をあらためて考えさせてくれました。

荒川 美代子

「美里の個性ある産物」

ごろりと並んだ野菜たちの表情が気になって、作品の前で足を止めました。コメントを読んでいたところ、ご近所からのいただきものを食べる前に描いたとのこと。アボカドの食べるべきタイミングを探るように、新鮮な野菜だけがすべてではないとあらためて気づかされました。そこには見ることと待つことがひとつになった、野菜の知られざる味わい方があるのかもしれない。



福田 勝千

「ハワイ行きてエ」

部屋に打ち寄せる波打ち際やヤシの実など、ハワイのイメージをストレートに絵にしようところにユーモアを感じました。高画質・高音質で情報化されたハワイが生活空間に同居しうる現在において、理想的な世界の所在や日常との距離を自問するような作品に見えました。モノトーンとカラーのモチーフが点在する描写は、一見すると気付かないほど自然です。



荒木 宣男

「蓋の中に空を見つけました」

遠目から初めて見たとき、そこにはまさに空がありました。近づいてみるとさっき見たはずのリアルな雲と空は、紛れもない「絵」となってそこに掛けてありました。いつまでもリアリティが保たれるような世界は存在しないのかもしれませんが、絵にしか表せない現実感と、最初に見た瞬間の視覚世界を強く印象付ける作品です。



高月 優

「見上げてごらん」

申し込み最終日の空の写真を展示した、もっともフレッシュな作品と言えます。吟味した写真を額装するのではなく、選ぶ間もなくそのときの空を受け入れる姿勢でない限り成立しない制作。サイズ制限により、おそらく理想的な展示ではないのではと想像しましたが、たるんだ印画紙も自然で、テグスを止める小さな金具や安全ピンの使用など、重力に抗う感じのしない軽やかさに引かれました。

中村 晃貴

「子どもの頃」

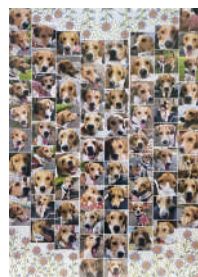
子どもの傘はカラフルなことが多いので、もしかしたら今の作者の足元に子ども時代の姿をかさねて描いたのでは？そんな勝手な想像をしました。個人的には、砂遊びなど足元を見つめる時間が多かった自分の幼少期を重ねて見ていました。全体のトーンは薄暗く、絵そのものには色の変化が少ないのにとても印象に残った作品です。



kou

「でん[伝]」

熊本市在住の人にもなく届く「市政だより」は、市民にとってはとても身近なものと聞きました。台湾コラム3という題字のイラストが電車の側面に見事にフィットしたり、さりげない情報の断片が切り抜かれ、電車の一部になるとつい読んでしまう。過去の情報ではなく、新たな素材になっているからです。人やモノを運び、今、街をめぐる路面電車の見方も変わる作品だと思いました。



清島 桜穂子

「SPIKE」

スマホのストレージに並んでいる愛犬を想像しました。それが美術館に並ぶと、飼い主が感じているような可愛らしさを超えて、別の何かとして迫ってきます。「複眼」的な犬の目に映り込む作者の自画像かもしれません。瞬間的な犬の表情を記録し、いつでも引き出せるようになった今、私たちは一体そこに何を感じ取ることができるのでしょうか。全体がハートに見える、まるで犬の顔の形みたいとの声もありました。



山口 紗瑛

「誰かの居場所に」

展望台に立つと目によるこび、心は視界の中へと一気に引き込まれます。同時に足裏や日常との距離感から何かを感じているのではないのでしょうか。この作品には、街やビルに見立てられた電子回路の空間が広がっています。正面に据えられた大きなメガネが象徴するものは何でしょうか。作者が今感じている街の変化の兆しのようなものが足元の素材に表れているのかもしれない。

熊本市現代美術館

Contemporary Art Museum, Kumamoto

www.camk.jp

ART KISS LETTER Vol.111(2024年1月)

編集：佐々木玄太郎 岩崎美千子

デザイン：apuaroot

発行：熊本市現代美術館

〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3 Tel 096-278-7500

